

日本語の韻律単位の発達 - 音節とモ - ラの関係を中心に -

伊藤友彦(いとう ともひこ)
東京学芸大学

(要旨) 日本語の韻律単位としてモーラや音節がよく知られているが、その獲得過程について詳しいことはまだ明らかになっていない。今回の発表では筆者がこれまで行ってきた日本語の韻律単位の発達に関する報告を、1) 発話の中断点を手がかりとしたもの、2) 語形の簡略化現象を手がかりとしたもの、3) 語の自覚的分節化を手がかりとしたもの、の3つに分け、その概要を紹介する。

Key words: 日本語, 韻律単位, モ - ラ, 音節, 幼児

1. はじめに

日本語の韻律単位としてはモーラや音節がよく知られているが、その他に重音節やフット(foot)という単位の存在も指摘されている。しかし、その獲得過程について詳しいことはまだ明らかになっていない。この点を明らかにすることは音声言語の発達とその障害のみならず、読みの獲得過程とその障害を明らかにする上でも不可欠であると思われる。以下では、筆者がこれまで行ってきた報告を、方法の違いによって3つに分け、その概要を紹介する。

2. 発話の中断点を手がかりとした検討

発話に関わる言語処理機能を検討する方法の一つとして言い誤りや言い淀みなどの発話の非流暢性ないし自己修正を手がかりとする方法が知られている。伊藤(1999)は発話の自己修正における中断点の位置を手がかりとして音節、モーラなどの韻律単位の獲得過程を検討した。

音節またはモーラが言語獲得初期から発話における韻律単位として心理的に実在している場合、1~2歳児の段階で既に音節またはモーラ境界が発話の中断点として観察されるはずである。対象児は1~2歳の健常幼児であり、一語発話段階17名、二語発話段階18名、多語発話段階19名であった。

その結果、一語発話段階では語中に中断が生じた幼児は17名中1名のみであった。このことから、一つの可能性として、一語発話段階ではほとんどの幼児において音節やモーラが発話における韻律単位としてまだ確立していないことが示唆された。一方、二語発話段階では、1音節(1モーラ)、1音節(2モーラ)、2音節(2モーラ)、の中断点を示した幼児が観察されたが、いずれも3割に満たず、三者間に差はほとんど認められなかった。このことから、二語発話段階は音節やモ

ーラそしてフットが発話における韻律単位として確立しつつある段階ではないかと推測される。

これに対して、多語発話段階では1音節(1モーラ)直後の中断が生じた幼児の割合が1音節(2モーラ)、2音節(2モーラ)直後で中断が生じた幼児の割合よりも著しく高かった。このことから、多語発話段階の幼児の発話においては音節ないしはモーラが重音節、フットよりも中心的な単位となっている可能性が示唆された。

3. 語形の簡略化現象を手がかりとした検討

幼児の発する語は必ずしも最初から成人と同じ音声形ではなく、一部が省略される現象が観察されることがある(例:ドラエモンを「ダエモン」)。この現象は短縮語(truncations)と呼ばれる。伊藤(2000)はこのような短縮語を手がかりとして、日本語を母語とする1~2歳児の韻律単位を検討した。対象児は1~2歳の保育園児47名であった。その結果、以下の点が明らかになった。(1)1モーラからなる短縮語は短縮語全体のわずかに5.0%であった。これに対して、(2)重音節(2モーラからなる音節)2つからなる短縮語の割合は40.0%を占め、(3)4モーラからなる短縮語は50.0%に達していた。言語学の領域では1モーラ語を禁止する最小語条件の存在が知られており、窪田(1993)は重音節が無標の構造である可能性を指摘している。伊藤(2000)の結果から、日本語を母語とする1~2歳の幼児において既に最小語条件が機能していること、重音節やフットのみならず、重音節の連続、さらに4モーラも韻律単位として存在していることが示唆された。

4. 自覚的分節化法による検討

1) モ - ラへの自覚的分節化の発達と文の読みの獲得との関係

韻律単位に対する意識的ないし自覚的知識

の発達研究は文字の読みの獲得研究との関係で行われてきた。伊藤・辰巳(1997)は特殊拍に対するメタ言語知識の発達を明らかにしようとする研究の中でモーラへの自覚的分節化の発達を検討した。伊藤・辰巳(1997)が用いた語は4種類の特殊拍をそれぞれ含む4単語(スイカ、リンゴ、ボウシ、ハッパ)であった。自立拍のみからなる語(おさかな)を用いて、モーラごとに区切った発話の例を示し、「このように一つずつ切ってください」と教示した。対象児は3歳から6歳までの健常幼児、各年齢20名、計80名であった。

この研究の結果、3歳ではモーラへの分節化が可能な幼児の割合はどの語でも40%以下であったが、4歳以降はハッパを除く3語すべてをほぼ全員がモーラへ分節化できることが明らかになった。また、4歳では1文字以上の音読が可能な幼児の割合は40.0%に留まったのに対し、全員がモーラへの分節化が可能であった(ただしハッパは除く)。この結果はモーラという韻律単位が文字の獲得以前に既に日本語を母語とする幼児に心理的に実在していることを示唆している。

2) 文字の読みを獲得する前の幼児における韻律単位の獲得

伊藤・辰巳(1997)では音節へ分節化した反応は報告されていない。これはなぜだろうか。伊藤・香川(2001)の目的は、伊藤・辰巳(1997)をふまえて、音節とモーラとの関係をさらに詳しく検討することであった。刺激語として特殊拍(撥音)を含む「あんぱんまん」と「ばいきんまん」、「しんかんせん」の3語を用い、伊藤・辰巳(1997)と同様の方法で実験を行った。3歳～6歳の幼児80名を対象にして読みの課題を実施し、その中から文字獲得前の幼児36名のデータを分析対象とした。

その結果、音節とモーラの両方が文字獲得前の幼児に心理的に実在していること、モーラは文字獲得以前に加齢とともに発達するが、文字を獲得した幼児ほどには確立した単位となっていないこと、が示唆された。伊藤・辰巳(1997)で音節へ分節化する反応が観察されなかったのは用いられた刺激語の音韻論的性質によると推察された。

3) モーラ方言とシラビーム方言の比較

日本語にはモーラを基本単位とするモーラ方言と音節を基本単位とするシラビーム方言が存在するといわれている。東京方言や近畿方言は基本的にモーラを基調とするモーラ方言であり、鹿児島方言や秋田方言は音節単位の方言(シラ

ビーム方言)であるといわれている。もしそうであれば、モーラを基本単位とするモーラ方言と音節を基本単位とするシラビーム方言では韻律単位の発達にも相違が認められる可能性がある。

伊藤(2001)はシラビーム方言である鹿児島方言を話す幼児とモーラ方言である東京方言を話す幼児を対象として、文字獲得前の段階における韻律単位を自覚的分節化法を用いて比較した。対象児は鹿児島方言を話す幼児22名と東京方言を話す幼児22名であり、いずれも文字の読みを獲得していない段階であると判断された3～4歳児であった。実験は1)音読課題、2)自覚的分節化課題、の2課題をこの順序で行った。

この研究の結果、1)シラビーム方言話者もモーラ方言話者も「モーラへの分節化のみ」に属する幼児は存在しないこと、2)シラビーム方言話者では「音節への分節化のみ」に属する幼児の方が「モーラと音節への分節化」に属する幼児よりも多い傾向があるが、モーラ方言話者ではその逆の傾向が認められること、などが明らかになった。

文献

- 伊藤友彦・辰巳 格 (1997) 特殊拍に対するメタ言語知識の発達. 音声言語医学, 38(2), 196-203.
- 伊藤友彦 (1999) 発話における中断点の発達的变化と韻律単位の獲得. 文部省科学研究費特定領域研究「心の発達」平成11年度研究成果報告書, 147-153.
- 伊藤友彦 (2000) 幼児の音声形の簡略化現象と韻律単位の獲得. 日本音声言語医学会第45回総会・学術講演会プログラムおよび予稿集, 53.
- 伊藤友彦・香川 彩 (2001) 文字獲得前の幼児における韻律単位の発達. 音声言語医学, 42(3), 印刷中.
- 伊藤友彦 (2001) 幼児期における韻律単位—シラビーム方言とモーラ方言の比較—. 文部省科学研究費特定領域研究「心の発達」平成12年度研究成果報告書, 193-199.
- 窪園晴夫 (1993) 日本語の音節量. 「日本語のモーラと音節構造に関する総合的研究(2)」(文部省科研費・重点領域研究「日本語音声」E10班研究成果報告書), 72-101.